

活動報告書

報告者氏名：森本 高久

所属：長野県若槻養護学校

記録日：2013年2月21日

【対象児（群）の情報】

- ・ 学年 高等部3年生
- ・ 障害名 選択制場面緘黙 知的障害
- ・ 障害と困難の内容
 - ①生活リズムをすぐに崩してしまうため、入院をしてリズムを取り戻そうとしている。
 - ②表情や傾きなどで日常でのコミュニケーションをある程度こなせることで、自ら自分の思いを表現することが少ない。そのため、困ったことがあると家にこもってしまう。
 - ③苦手意識から文字を書くことにも抵抗があり、書いてもひらがなで単語程度。
 - ④体を動かしたり地図の読み取りに優れているが、1桁の繰り上がりの足し算に不安を持ったり、文章を読むことに苦手意識を持っている。

【活動目的】

- ・ 当初のねらい
 - ①一時帰宅が認められ、週に2日家からの通学が可能になった対象生であるが、電車の乗り換えや乗車時刻に不安を持っていた。専用の時刻表を制作していたが、自分で時刻を調べることに興味を持っていたので、iPadを使い、インターネットで調べながら通学することで、楽しみながら通学することを目指そうと考えた。また、生活リズムが安定することで退院をすることを目指した。
- ・ 実施期間 2012年6月～7月登校日
- ・ 実施者 森本 高久
- ・ 実施者と対象生の関係 担当教員
 - ②場面緘黙であり、文字を書くことも嫌がっていた対象生と気軽にコミュニケーションを取るために、Hitsudan Pattoを利用して（ひらがなで入力する必要がある→漢字になると指で書くため文字が見にくくなる）書くことに抵抗感を減らそうと考えた。
- ・ 実施期間 2012年7月～8月登校日
- ・ 実施者 森本 高久
- ・ 実施者と対象生の関係 担当教員
 - ③学習の定着を図るため繰り返し学習を行う必要のある対象生であるが、楽しみながら学習できないかと考えた。教師が○×をつけるとどうしてもできない部分に目が行ってしまい、学習意欲が上がってこない様子が見られたので、自分ができた部分が目でわかり、一方でウィークポイントも分かるアプリ **Math drills** を取り入れて学習を積み重ねていこうと考えた。
- ・ 実施期間 2012年7月～2013年2月 数学の時間47時間
- ・ 実施者 森本 高久
- ・ 実施者と対象生の関係 担当教員

【活動内容と対象児（群）の変化】

①生活改善・通学支援

・対象生の事前の状況

生活リズムの回復のため長期入院中（4月から週2日の外泊が認められるようになっていた。）母に送迎してもらうことがほとんどで、朝登校を渋る様子が見られていた。自力通学については乗り換えに不安を持ち積極的ではなかった。

・活動の具体的内容

自分で時刻を調べることが好きなので、インターネットのブックマークを利用。それぞれの時刻表のサイトを登録し、教室や確認してから出発する。不安にならないようにiPadをバッグに入れて移動した。

・対象生の事後の変化

不安なく電車での登校ができるようになった。

②コミュニケーション

・対象生の事前の状況

表情や頷きだけでコミュニケーションを取っていた対象生。書くことに苦手意識を持ち、自分の思いを書いて表現することもほとんどなかった。

・活動の具体的内容

Hitsudan Patto を使って、朝・放課後のHR時に一言書いて発表する。その話題についてクラスので取り上げ、コミュニケーションをとる場面を設けた。

・対象生の事後の変化

Hitsudan Patto からホワイトボードに変えて、自分から漢字を書こうとする姿が見られるようになった。

③数学での利用

・対象生の事前の状況

高等部2年までは日常の計算に困らないように、買い物計算を中心とした学習を行っていた。記録をみると小数点の足し算や割り算なども学習していたが、1桁の足し算でも繰り上がりがある問題に時間がかかる状況があった。

・活動の具体的内容

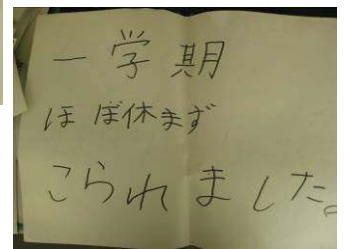
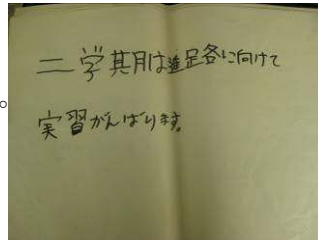
アプリ「Math drills」を使って100問のドリル活動を時間の最初に取り組む。不安な場合は10問の演習問題を使い、数直線や100玉そろばんを使って確認する。終了後、間違いが多い計算について担任と振り返る。

・対象生の事後の変化

3桁や4桁の繰り上がりの計算も、迷うことなく行うことができるようになった。

周りを見たり担任の方を確認したりするが、国語の漢字練習にも意欲的に取り組むようになり、分からない文字があると、繰り返し学習する姿も見られるようになった。

将来、職場の方に書いて分からない部分を説明できたり、メールを使って欠席連絡ができたりにするようになり、定型文でもよいので書いたり、入力したりするなどして自己表現ができたりにするようになり、卒業に向けて準備を進めたい。



③数学での利用

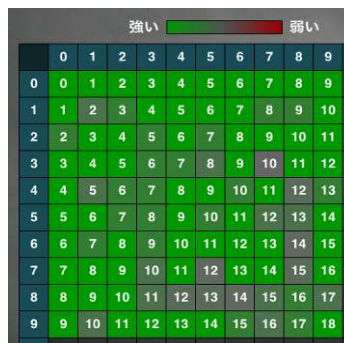
・主観的気づき

数学の時間になると露骨にいやな顔をしていたり、iPadを渡しても別のアプリを始めようとしていたりしていたスタート時から変わり、時間が始まるとすぐにMath drillsを開きチャレンジしようとする姿が見られる。足し算のドリルを繰り返し、なかなか記録が更新できないと引き算にチャレンジしようとする姿も見られた。実習の時に「そこにあるダンボールと合わせて全部で14箱作ってくれ」といわれて、そこにあった6箱の段ボールと合わせて8箱、14箱を困らずに作ることもできたことなども大きな自信になったと思われる。

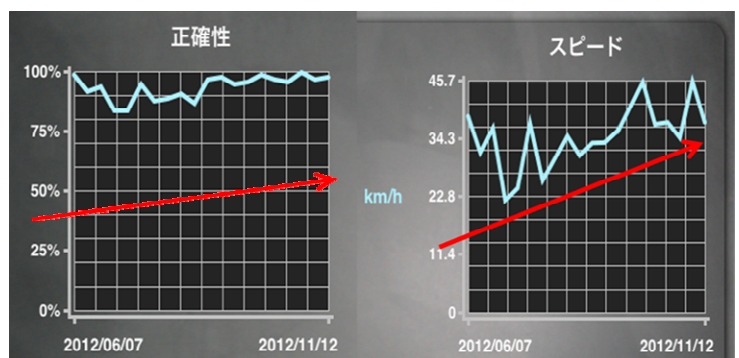
・エビデンス（具体的数値など）

ドリルを繰り返していくと、グラフなどにして、計算の得意な部分をそうでない部分。問題を解くのに早い部分とそうでない部分を表してくれ、自分の課題を自分で確認することができます。

(左の図：緑に近づくほど正解率が高い、赤に近づくほど正解率が低くなる。右の図はスピードが速いと色がつかないが、遅い問題は赤くなる)



グラフから正確性もスピードも上がっています。スピードのトップ10に入ると表彰してくれるので、終わるたびに確認して次への目標としていましたし、入らないと本当に悔しそうな表情をしていました。



・その他エピソード（画像などを含めて）

基礎基本のドリルを繰り返していたことによって3桁や4桁の筆算になっても不安なくすることができた。最初、試しに板書すると、前に出てきて自信ありげに記入する姿を見て驚きました。

引き算がなかなかできずにイライラする姿がありますが、「できなくて当たり前」と手を付けずに敬遠していたころに比べると、自信とプライドが出てきていることが伺えます。

卒業後の日常生活では、難しい計算は携帯の計算機などを使うようにし、実生活で困らないようにできればと思いますが、こうして積み重ね繰り返して学習することによって、足し算が計算できるようになったことは大きな自信につながったと思われます。

